

イメージ同定の授業

テンポよく導入は短く

8月30日(火)5校時に、3年4組で瀬尾純子先生による国語の研究授業が行われました。チャイムとともに授業のあいさつをし、チャイムが鳴り終わる前に、教科書に載っている俳句の音読を始めました。先生の範読に続き、生徒は一斉に声を出して読みます。音読では全員が声を出していることが重要です。既に全員が集中しています。

その後、教科書にある次の俳句が提示されました。

バスを待ち大路の春をうたがはず

「大路」の意味を辞書で調べます。「うたがう」も調べます。生徒は国語辞典を使うことに慣れてしています。そして、『『大路の春』とは何だろう』という学習課題が提示されました。ここまで、テンポよく和やかな中にも適度な緊張感をもって進んでいきました。無駄がなく、課題意識を持たせることができた導入でした。

たっぷり時間をとった自力解決

課題解決へ向けて自力解決の時間を13分間とりました。十分な時間を確保したからといって自力解決がうまくいくわけではありません。学習課題に、生徒がじっくり考えるだけの価値がなければなりません。また、自力解決に導くためには考えるための視点なども必要です。この授業では、読みの視点として、視覚、聴覚、嗅覚、天候、時間帯などを与えていました。

リーディングスキルの視点はイメージ同定

イメージ同定とは、文と非言語情報(図表など)を正しく対応づける力です。ワークシートには、バス停で待っている女学生の後ろ姿が描かれており、そこから見える様子を想像し、イラストを描くようになっていました。生徒は、イラストを描きながらイメージをふくらませ、それを文章に書いていきました。桜の花、たんぼぼ、街路樹、蝶、小鳥、黄色の帽子をかぶった小学生、新しいスーツの社会人、さわやかな風、人の話し声、鳥のさえずり、花の香り、太陽などをイメージしていきました。

自分の考えの再構築

学習の流れが個からペア、全体そして個に戻っています。グループや全体での交流で終わらずに個に戻すことがポイントです。学習は個において成立します。全体での交流では、「春をうたがはず」となっていることから、春が来たことを確信していることを確認し、課題に対する最終的な自分の考えをまとめました。そして、最初の考えから新たに加わった言葉に赤線を引かせることで、自分の学びの深まりを実感させていました。

視点を明確にした振り返り

振り返りに入る時点で残り6分でした。自力解決に13分間を使い、ペアや全体での交流をし、再び自分の考えをまとめても、振り返りのために6分間を確保できています。ここで、コンパクトな導入が生きてきます。書くための視点を2つ用意し、生徒に選ばせていました。生徒に選ばせ決めさせる自己決定は、生徒指導の機能の一つです。生徒は、俳句の読み方がわかり、イメージする楽しさを味わい、わかった、できたという成就感も得ることができたはずでした。そして、次時での俳句創作への意欲をもつことができたことと思います。

活動あって学習あり

学習指導案の指導過程を見ると、学習活動・内容の欄に、学習内容がきちんと書かれてあります。これは、教材研究の成果であり、予想される生徒の考えでもあります。これならば、活動あって学習なし、内容なし、学びなしに陥ることはありません。学習指導案は、授業の設計図です。設計図があやふやであれば家が建つことはありません。授業も同じです。

早々と2学期の研究授業がスタートしました。今週は、3つの研究授業が行われました。次々と学習指導案が起案されており、これからも研究授業が続きます。それだけ、授業が充実するという事ですから、生徒にとっては学びの秋となっていきます。